# レーニンにおける教育－文化変革の視座と論理

堀内　　攻

1. 序 ― レーニン教育・文化論の今日的意義
　a レーニンにとっての教育・文化
　b 現代教育改革とレーニン教育論
2. レーニン教育・文化論の基礎
　a 「自然発生性への拝跪」批判 ― 『何をなすべきか』を中心に―
　b 国家論と教育・文化論 ― 『国家と革命』を中心に ―
3. ブルジョア文化とプロレタリア文化
　a その理論と現実認識
　b ブルジョア文化の認識とプロレタリア文化の位置
4. レーニン教育・文化論の問題と課題
5. 過渡期社会の教育・文化
　a ロシアの現実と過渡期社会の原理
　b 先進国革命における過渡期と教育・文化革命

## 1. 序 ― レーニン教育・文化論の今日的意義

### a レーニンにとっての教育・文化

ロシアの革命家の多くがそうであったように，レーニンもまたその革命家としての出発点をナロードニキの影響の下で形成した。多くの評伝がレーニンの革命への覚醒を，兄アレクサンドルのツァーリ暗殺計画による処刑に求めているし，レーニン自身「僕の道は兄がしいた」と語ったと伝えられている。そのアレクサンドルは急進的ナロードニキ集団，「人民の意志派」の一人として活動していた。ナロードニキの思想は，一般にインテリゲンチャによる農民の啓蒙に革命の道を見い出し，ロシアの農村共同体，ミールこそロシアを資本主義から守る防壁であるとする点で極めてロシア的であった。ロシアにおいては農民が圧倒的であり，農民を語ることなく革命を問題としえなかった。そしてロシアの革命を口にする誰にとっても，その最大の障害は，農民の無教育，文盲状態であり，その直接的表現が「人民の中へ」であった。

ナロードニキが農民の啓蒙に限界を感じ，求めたのが「人民の意志派」に代表されるテロルの道であったが，同じ頃，この純ロシア的運動に対し，新しい西欧の潮流がロシアに浸透しつつあった。それがプレハーノフ，ザースリッチらに指導される，ロシアにおける最初のマルクス主義団体，「労働解放団」であった。レーニンは無知で文盲のロシアという同じ現実に立ちつつも，テロリストから自由主義者に変わりつつあったナロードニキ思想とも決別した次元で自己の思想

を形成してゆく。

当時のロシアは典型的な専制国家であり，その教育も専制国家に典型的なものであった。カテキズムと若干の読み書きを内容とする二年ないし四年制の教区学校が公立学校と並存し，数においてもレーニンの指摘する如く，[1] 圧倒的に不足していた。そしてそのしわよせを農村が一身に集めていた。

レーニンの父，イリヤ，ニコライヴッチ，ウリャーノフはこうした教育状況の中で視学官として真摯に教育を考えた教育者であったといわれている。レーニンにとって貧困なロシアの教育事情は父を通して十分に認識されていたことだろう。だがレーニンの教育への認識は教育をただ教育の次元で問題とするに止まらなかった。１９００年までの活動でレーニンが主要に追及したのは，チェルニシェフスキのロマン主義的，かつ反動的「革命論」であり，その主軸にチェルニシェフスキの教育認識があった。

レーニンにとって教育はロシアの現実を考えれば考えるほど，政治 ── 経済との関わりにおいて，すなわち階級闘争の一環としてのみ位置付くべきものに他ならなかった。レーニンにとって主要にロシアの教育状況が問題とされるのは，「革命」を保障してゆく人民の知的水準を巡ってであり，この点は一貫して保持されてゆく。だがこの視点とは別に，資本主義と社会主義との哲学に関わって人間存在の主体性の問題が教育の課題として提起されざるをえなかった。革命後に「プロレタリア文化の創造」を巡って論争されたように，蓄積されたブルジョア文化をいかに評価してゆくかでレーニンは独自の立場を示した。レーニンにとって，教育 ── 文化の問題はすぐれて革命の遂行，保障に関わって意識されていたのである。

レーニンは１９２４年１月にその生涯をとじ，彼の頭脳はその一年前に活動を停止せねばならなかった。すなわちネップが軌道にのると共に社会主義の後退をまのあたりにしつつ，革命の遂行に様々な危惧を抱いて没していったのである。それ故に彼の晩年の著述は，危機的状況を乗り切る教育 ── 文化の問題が主要に論じられている。ここから我々はレーニンの社会主義社会論との関わりで社会主義教育論を見てとることができるが，残念ながら彼の手による社会主義建設に裏打ちされた具体的，現実的な社会主義教育論を見い出すことはできない。

だが我々にとって何よりも貴重であるのは，社会革命を基底として展開された，レーニンの教育改革の論理と構造である。ここからロシア革命が現代社会に鋭く提起した課題を教育変革の現代的課題として把え返すことができるであろう。

b　現代教育改革とレーニン教育論

レーニンは「あらゆる革命の根本問題は国家権力の問題である」と断言した。[2] だが同時にその革命権力を支え，真の革命を保障するものが人間そのものに外ならないことも明らかにした。

ロシア革命の我々への遺産は単に権力の問題であったのか。革命が神話化され，それが突き崩されてゆき，レーニンが無謬の革命家として絶対化されてきた。この現実を打破することなくして，レーニンの生きた時代を，ロシア革命を現代が受け継ぐことは出来ないであろう。レーニン

自身「エンゲルスは無謬ではありません。マルクスも無謬ではありません。」と語り，新たな創造の上でこそ革命が成就されうることを示している。(3)

ロシア革命は社会主義への展望を現実のものとしたことによって，現代史の序曲となりえた。ロシア革命は事実として，その価値を示したと同時に，人類にとって全く新しい社会体制を創造する思想的源泉を再創造したことにおいてもその意義をもっている。

教育におけるロシア革命の意義は，何よりもすぐれて近代公教育の諸前提，もしくは諸原則を現実的にも思想的にも転倒していった点にこそ見い出しうる。近代公教育が資本制生産にその基底を措えているものであるが故に，その現実的な転倒は，資本制生産様式の転倒を媒介とせねばならず，そしてその前提として権力の転倒が求められねばならない。１９１７年革命がその時点において直接に実現したのはこの権力の転倒のみであったし，それもその後三年余の混乱，人的物的犠牲の上に成し遂げられたものであった。その基盤の上で１９２１年に生産手段の国有化がなされ，近代公教育を突き崩す物的条件の一部が創出された。だが近代公教育はブルジョア公教育としてそのイデオロギー形成の一端を担うと共に，ブルジョア的生産の基底としてある価値法則，等価交換としてある労働力商品，の形成機能を存在的に付与されている。近代公教育が現実に担っているのは，貨幣経済の下で労働力商品として物象化された人間の，まさにその疎外状況の再生産に他ならない。これは近代公教育の諸特質として具現化されている。すなわち，教育を受けることによる利益を個人に保障しようとすればするほど，公教育として国家の役割が増大せざるをえないこと，教育をより社会的なものとすればするほど，学校という特別な教育機関が増強されること，その学校においては，全面的な教育＜eduation＞と区別される知的訓練＜instraction＞が軸とされること，教師は教育という他と区別される一領域において，賃金生活者として「普遍性」を要請される「価値」を担わざるをえないこと，等々。

ロシア革命はこれら近代公教育の諸特徴の一つ一つを打破してゆく基盤を創り出したり，現に１９２０年代の実験的諸改革としてそれは試行的に実現されていった。そしてそれらの成果は人間を自由な類的関係において再創造してゆく展望を内在化したものであらねばならなかったし，それには価値法則の止揚，貨幣経済の廃絶，国家の止揚を同じ方向の下で共有すべきものであった。

レーニン，トロッキーら革命の指導者の多くはロシア革命の完遂を世界革命の展望に託していた。しかし１９１９年ドイツ革命の流産によりその展望は大きく後退し，困難な状況が現実のものとならざるをえなかった。レーニンの政策がより現実的なものを追求せざるをえなかったのを，こうしたロシア革命の孤立に由来する。レーニンが現実を踏まえつつ打ち出した理論は，レーニンの死後原則にまで「高められ」今日にまで至っている。レーニンの死後５０年を経た現在，近代公教育を本質的に止揚する諸原理は未だ確立されてはいない。のみならずその方向の追求すら十分とは言いえない。

教育改革はすぐれて社会経済的な問い返しの中で具体的かつ本質的たりうる。現在さまざまな形で問われている教育の問題を深化させれば，そこに一つの体系ないし体制の輪郭を描くことが

出来るであろう。そしてそれは歴史的に概括すれば，１９世紀後半以後，世界的に成立してきた近代公教育体制であり，それは資本制生産様式の確立と軌を同じくすることから，人間の物象化が前提とされており，その変革もすぐれてこの一点に焦点化されねばならない。現在の教育改革といわれるものは，この前提の肯定に立脚したものであるが故に「変革」の本質的契機を内在化してはいない。

この課題は何よりもプロレタリア革命の本質に関わっており，それ故に教育・文化革命がプロレタリア革命の生命とならねばならない。この点を，ロシアの後進的現実に触発されて洞察したのがレーニンであった。レーニンの教育・文化に関する論及は革命総体の中でのみ位置し，政治経済的に極めてトータルな視座をもつものであった。そこには近代公教育に対する本質的な批判の契機と共に，より生産的に，社会主義教育の指針がプロレタリア革命の展望の一環として示されている。資本主義から社会主義への過渡に位置するロシア革命の現実，それを踏まえたレーニンの論述，我々は「レーニン教育・文化論」から何を把み取るべきか。

これ迄の行論からも示される通りであるが，整理すれば次の如くである。

(i) 革命・権力の問題と関わってのブルジョア教育・文化の本質

(ii) 過渡期における教育・文化の位置と役割

(iii) プロレタリア革命の論理における教育・文化の位置

具体的にはこれら三点を通じて，近代公教育変革＝止揚の論理を把握してゆくが，更にロシア革命から半世紀を過ぎた今日，そのパースペクティブの展開途上で新たな社会主義教育論の構築を追求せねばならない。

## 2. レーニン教育・文化論の基礎

### a 「自然発生性への拝跪」批判 ―― 『何をなすべきか』を中心として ――

「自然発生性への拝跪」に対するレーニンの批判は，レーニンの党組織論の基礎理論として広く理解されているが，それに止らずレーニンの革命論において中核的部分を占めており，また間接的にではあれ，教育・文化論の基礎ともなっている。革命後のレーニンの教育・文化論における「ブルジョア文化から学べ」という一方向と，この「自然発生性への拝跪」批判との矛盾は，一般に平板化されて理解されているように思われる。

レーニンは１９００年を境として，ブルジョア民主主義革命への志向から決別し，社会主義革命を具体的に自らの視野に入れてゆく。この中核となったのが，その党組織論であった。そしてその直接的契機がロシアに持ち込まれた「経済主義」的社会主義理論への闘いである。１９０２年の著作『何をなすべきか』は集約的にこの問題意識の下で書かれており，以後ロシア社会民主党，更には今日に至るまでの「前衛党論」のテキストとされている。以下そこにおける「自然発生性への拝跪」批判を要約的に概観し，レーニンの教育・文化論との関わりにおいて検討してゆきたい。

レーニンの問題意識がロシア社会民主党の建設に深く関わっていたことは当然であるが，この問題を特殊後進ロシアにのみ限って把えていたのでは決してない。なぜなら，この「自然発生性」について何より多く学んだのは，イギリスの組合主義（Trade Unionism）からであり，またヨーロッパにおける最大の党，ドイツ社会民主党の有力な一方向として，この「自然発生性」への拝跪」が表面化していたからである。

まずレーニンは「<自然発生的要素>とは，本質上，意識性の萌芽形態にほかならないということである。それに，原始的な一撥にしても，すでに意識性のある程度の覚醒をあらわすものであった」ことを，１８９０年代のストライキから導き出し，「これらのストライキは，組合主義的闘争であって，まだ社会民主主義的闘争ではなかった」と理解する。このことは，「労働者は，自分たちの利害が今日の政治的・社会的体制全体と和解しえないように対立しているという意識，すなわち社会民主主義的意識をもっていなかったし，またもっているはずもなかった」ことからである。なぜなら「この意識は外部からしかもたらしえなかったもの」であり「労働者階級が，まったく自分の力だけでは，組合主義的意識，すなわち，組合に団結し，雇主と闘争を行い，政府から労働者に必要なあれこれの法律の発布をかちとるなどのことが必要だという確信しか，つくりあげえないことは，すべての国の歴史の立証するところ」だからである。(4)

言い換えれば，労働者は「なにか未来の世代のためなどではなく，自分自身と自分の子どもとのためにたたかっているのだということを意識して，闘争を」(5)行うだけであり，真の階級意識，「意識の最高形態である政治意識」(6)を得ることはない。

レーニンは，政治意識が，プロレタリアートにとって，外部からのみ，ブルジョア・インテリゲンチャによる学説，理論，知識としてのみもたらされる，と断定する。

「社会主義の学説は，有産階級の教養ある代表者であるインテリゲンチャによって仕上げられた哲学，歴史学，経済学上の諸理論のうちから，成長してきたものである。近代の科学的社会主義の創始者であるマルクスとエンゲルス自身も，その社会的地位からすれば，ブルジョア・インテリゲンチャに属していた。」(7)

このようにレーニンは，労働者階級とマルクス主義政党との位相を明確にした上で，「革命政党」が労働者階級の「自然発生性」に拝跪することを，次の理由から「ひどいまちがいである」と批判する。

「いやしくも労働運動の自然発生性のまえに拝　することは，いやしくも『意識的要素』の役割，社会民主主義派の役割を軽視することは，とりもなおさず ―― その軽視する人がそれをのぞんでいようといまいと，それにはまったくかかわりなく ―― 労働者にたいするブルジョア・イデオロギーの影響をつよめることを意味する，ということである。」(8)

「労働者大衆自身が彼らの運動の行程それ自身のあいだに独自のイデオロギーをつくりだすということが，考えられない以上※は，問題はこうでしかありえない，―― ブルジョア・イデオロギーか，それとも社会主義的イデオロギーか，と。そこには中間のものはない（なぜなら，人類はどんな<第三の>イデオロギーをもつくりださなかったし，それにまた総じて，階級矛盾

によってひき裂れている社会に階級外のまたは超階級的なイデオロギーなどは，けっしてありえないからである。）だから，いやしくも社会主義的イデオロギーを軽視することは，いやしくもそれから離反することは，とりもなおさず，ブルジョア・イデオロギーをつよめることを意味するのである。」(9)

そしてこの課題を教育・文化論の領域で理解する上で，レーニンは，※で示した箇所への注をなしている。

「彼ら（労働者）が，多少ともその時代の知識をもっていて，この知識を前進させることができるときにだけ，またそのかぎりでだけ（社会主義的イデオロギーをつくりあげる仕事に）参加するのである。だが，労働者にもっと頻繁にこういうことができるようにするには，労働者の意識水準を全体としてたかめるために極力心をつかうことが必要である。そのためには，労働者は<労働者むきの文献>という人為的にせばめられた枠内にとじこもらないで，ますます多く一般的な文献を摂取することを学ぶ必要がある。」(10)

また，自然発生的運動，最小抵抗線に沿う運動が，なぜほかならぬブルジョア・イデオロギーの支配にむかってすすむのか，という問いに対して，次の如く述べている。

「それは，ブルジョア・イデオロギーが社会主義的イデオロギーより，その起源においてずっと古く，いっそう全面的に仕上げられていて，はかりしれないほど多くの普及手段をもっているという，簡単な理由による※」(11)

ここにおいても，前の引用と同様に重要な注が加えられている。

「労働者階級は自然発生的に社会主義に引きつけられる，としばしば言われている。この言葉は，つぎの意味ではまったく正しい。すなわち，社会主義理論は，もっともふかく，またもっともただしく労働者階級の困苦の原因を規定しているので，もしこの理論自身が自然発生性に降伏さえしなければ，もしそれが自然発生性を自己に従属させさえすれば，労働者はこの理論をきわめて容易にわがものとする，という意味である。」(12)（傍線は引用者）

以上，レーニンの見解を概観してきたが，　①自然発生的な労働者の意識が不断に「経済主義」「組合主義」へと結果してゆくのは，圧倒的な優位にあるブルジョア文化の影響によること，②そしてその時点においては，このブルジョア意識を止揚した（それ自身ブルジョア・インテリゲンチャであったとしても）イデオローグが「外部」から労働者に社会主義的意識を持ち込まねばならないこと，　③彼らの集団が革命政党となるべきこと，という三点が主張されていた。

そして労働者がこの革命政党の仕事に参加する場合には，「労働者としてではなく，社会主義の理論家として」(13)その知識を前進させねばならないのであり，そのために「一般的な文献」から，広くブルジョア文化一般から，学習せねばならないことを指摘している。

ここから，（後述するように）晩年の文化革命論として展開されるブルジョア文化一般の吸収を強調する論理が導出される。

また，「（社会主義）理論自身が自然発生性に降伏さえしなければ，もしそれが自然発生性を自己に従属させさえすれば，労働者はこの理論をきわめて容易にわがものとする」とレーニンが

注解している意味は，社会基盤そのものが，ブルジョア文化よりも社会主義文化が優位に立つことによって，転換せしめられた状況においての問題設定といえよう。

革命後のレーニンの教育・文化論は，落差をもった二つの方向性に時期的に区分できる。その第一は，『青年同盟の任務』として「ブルジョア文化」の吸収と「共産主義的モラール」形成が同時的に主張された時期のものであり，第二は，レーニンの政治的活動が不可能となった時期に書かれた，いわばレーニンの遺書的な諸論文『協同組合について』『われわれは労農監督部をどう改組すべきか』『量はすくなくとも，質のよいものを』に示される方向である。

すなわち，そこでレーニンが何よりも危惧したのは，ネップの進行により労働者階級が解体状況に置かれ，一方における農民から発生する小ブルジョア的傾向，他方における党組織そのものをも含んだ政権内部の官僚主義の強化であった。ここにおいてレーニンが何よりも追求したのは，「プロレタリア文化革命」としての文化水準の引き上げであり，ブルジョア文化からすら立ち遅れているロシア人民を第一にそこまで到達させんとすることであった。そのために何よりも必要なのが官僚主義化しつつあったボリシェヴィキ党そのものの改革に他ならなかった。

このように「自然発生性への拝跪」に対する批判は，一方における労働者の文化的素養を高めることによって，他方における党組織の「プロレタリアートの前衛」としての機能を行政面，統制面，において強化することによっての二面において追求されたのである。

b　国家論と教育・文化論 ―― 『国家と革命』を中心として ――

１９１７年４月にレーニンはペトログラードに戻り，労働者・兵士の熱烈な歓迎を受けた。そこで明らかにしたレーニンの革命の立場は「四月テーゼ」として打ち出されたもの，すなわち臨時政府を信頼せず，ソヴェトが権力を取るべきとする，社会主義革命の提起であった。当時においては，大多数のボリシェヴイキですら二月革命を社会主義革命へと転化することはほとんど全く考えていなかった。レーニンはこの時点において自分の党からさえ全く孤立した立場であった。四月八日には，ペトログラード党委員会において，レーニンのテーゼは十三対二，棄権一でもって否決された。しかしながら十四日の党ペトログラード市協議会，更に二十四日の党第七回全国協議会においては，少差ではあったが，レーニンの路線は一転して党の路線となった。これ以後ボリシェヴィキは，「全くの権力をソヴェトへ！」というスローガンを掲げ，社会主義革命の準備に精力的に取り組んでいく。

しかし，このボリシェヴイキの路線は，当然ながら臨時政府との敵対を意味した。七月三日のデモは，そのほとんど全てのプラカードにボリシェヴィキのスローガンが書かれ，四日間に及んだ。臨時政府をはじめ一般には，これがボリシェヴィキの権力奪取の布石として映り，政府はついにボリシェヴィキの弾圧にのり出した。ボリシェヴィキ自身は，この時点での権力奪取は考えておらず，このデモは自然発生的な性格を強く持っていた。それ故に政府の弾圧に対抗しえず，レーニンはフィンランドに逃れ，ジノヴィエフや，この時期に入党したトロッキーらが逮捕され，プラウダ編集局は閉鎖された。

この二重権力下において権力の武力奪取を考えていた時期に，レーニンがフィンランドにおいて書いたのが『国家と革命』である。それは副題を「マルクス主義の国家学説と革命におけるプロレタリアートの諸任務」とし，二重権力下のロシアを，マルクス・スンゲルスの原典に戻って国家論的に再検討し，プロレタリアートの権力奪取を促すものであった。

この著作は，緊迫した情勢の下で，逃亡先という不十分な条件の下で，短期間（一～二ケ月間）に書かれたものである。そのことからもレーニンの精徴な理論を述べたものとして理解することは危険である。

この著作には，明らかにレーニンの誤った理解が見られる。そしてそれは教育・文化論と関連して考えるならば，単なる一時的なもの以上の，極めて重要なものを含んでいると思われる。以下検討してみよう。

この著作が基本的に提起している点は次の三つである。

① 国家＝暴力装置説。国家は階級対立の所産であり，階級が止揚されることにより国家は「死滅する。」ブルジョア国家は「死滅する」のではなく，プロレタリア革命によって「揚棄される。」プロレタリア独裁によるプロレタリア国家はブルジョアジーを抑圧する。

② プロレタリア革命はブルジョア国家を粉砕し，プロレタリア独裁を確立する。社会主義を達成するには既存の国家機構の枠内において議会選挙に勝つことでなされえない。
議会の否定＝ソヴェトの意義。

③ 社会主義の実現はプロレタリアート住民の「記帳」「統制」能力にかかっている。「民主主義」はそれ自身支配原理であり，民主主義もまた国家であること。国家が死滅すれば同時に民主主義も死滅すること。社会主義においては住民自身の原始民主主義によって営まれること。

以上の観点は，マルクスが『フランスの内乱』『ゴータ綱領批判』等で，またエンゲルスが『反デューリング論』において展開したもののコピーであった。それをレーニンは緊迫したロシアの革命情勢の只中にあって極めてシャープな問題意識に裏付けられて，より具体的に展開した。

しかし次の点において，レーニンはエンゲルスを全く読み違えている。レーニンの教育・文化論にとって極めて重要な意義をもっているので，以下展開を追ってみよう。

レーニンはエンゲルスの『反デューリング論』から次の如き引用をなしている。

「プロレタリアートは国家権力を掌握し，生産手段をまずはじめには国有財産に転化させる。そうすることで，プロレタリアートは，プロレタリアートとしての自分自身を廃絶し，そうすることであらゆる階級差別と階級対立を廃絶し，そうすることでまた国家としての国家をも廃絶する。」(14)（傍線は引用者）

このエンゲルスの言葉をレーニンは次のように解説する。

「第一に，この考察の当初でエンゲルスはプロレタリアートは国家権力を掌握し，『そうすることで国家としての国家を廃絶する』といっている。これがなにを意味するか，……実際には，ここでエンゲルスが，述べているのは，プロレタリア革命によるブルジョア国家の『廃絶』のこ

とである。ところが，死滅という言葉は，社会主義革命後のプロレタリア国家組織の残存物について言われているのである。エンゲルスによれば，ブルジョア国家は『死滅する』のではなく，革命のあいだにプロレタリアートによって『廃絶される。』この革命のあとで死滅するのは，プロレタリア国家または半国家である。」(15)

エンゲルスの文章をそのまま理解するならば，エンゲルスは時間的順序をもって国家の死滅を述べている。レーニンは「廃絶される」「国家としての国家」を「ブルジョア国家」と読み取り，「廃絶」と「死滅」を区別している。しかし国家を権力に焦点化して考えるならば，レーニン自身そう把えている，プロレタリアートが「国家権力を掌握し」た時点においてブルジョア国家それ自体は消滅する。そしてプロレタリア権力下において「生産手段の国有」化がなされ，プロレタリアートが自らを，「階級」としてのプロレタリアートを，廃絶してゆき，階級そのものが廃絶されてゆく。そのことによって「権力」としての「国家」は消滅する。

レーニンは，この「国家としての国家」を「ブルジョア国家」と読み取り，その「廃絶」のあとで，「プロレタリア国家」が「死滅する」とする。とするならば，明らかに，生産手段の国有化，階級の廃絶は「ブルジョア国家」の下においてなされてゆくことにならざるをえない。

レーニンの他の展開と合わせ読むならば，この箇所は，「国家観」と結びついている。レーニンは「国家」を次の如く理解している。

「マルクスによれば，国家は階級支配の機関であり，一階級が他の階級を抑圧する機関であり，階級の衝突を緩和させながら，この抑圧を法律化し強固なものにする『秩序』を創出することである。」(16)

たしかにマルクスの国家説は一方において，このようなものであった。しかしレーニンにあってはこれが全てである。いわゆる「国家＝暴力装置説」である。

国家が暴力装置のみであるならば，国家の「死滅」は，まさに国家そのものがあらゆる形において消滅することであり，「廃絶」などではない。

しかしながら，国家には，レーニンのいう「暴力装置」＝階級抑圧の機能と共に，共同利害に関わる機能をももっている。マルクス主義国家論において問題とされるのは，この階級抑圧という特殊利害を，ブルジョア国家が「一般利害」とし，国家そのものを普遍化する国家イデオロギーである。この意味において国家論の中心軸がレーニンのいう「暴力装置」にあることは正しい。しかし未来社会との関連で語る場合，特殊利害と共同利害の関係は国家論として正しく位置付けられねばならない。

これを正しく述べたのが，マルクス『ゴータ綱領批判』であった。

「つぎに問題になるのは，国家組織は共産主義社会においてはどんな転化をこうむるかということである。いいかえれば，そこでは今日の国家機能に似たどんな社会的機能がのこるか，ということである。……資本主義社会と共産主義社会とのあいだには，前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は，プロレタリアートの革命的独裁以外のなにものでもありえない。……ところで，この綱領は，この後者

についても，共産主義社会の将来の国家組織についても，なにも論じていない。」[17]（傍線は引用者）

「この後者」とはプロレタリア独裁社会であり，それと区別したものとして「共産主義社会の将来の国家組織」についてマルクスは述べているのである。しかしながらレーニンにとって，マルクスのこの叙述は十分に把握され切っていない。『国家と革命』第五章第一節において，レーニンはこのマルクスの言葉「共産主義社会の将来の国家組織」を次の如く理解している。

「エンゲルスは，国家についてのおしゃべりをまったくやめ，国家という言葉を『共同社会』という言葉ととりかえて，綱領から国家という言葉を完全に放逐するように，ベーベルにすすめている。エンゲルスは，コンミューンはもはや本来の意味の国家ではなかったとさえ言明している。ところが，マルクスは，『共産主義社会の未来の国家制度』さえうんぬんしている。すなわち，共産主義のもとでさえ国家が必要であることをみとめているようである。

しかし，こうした見解は，根本的に誤りであろう。いっそうくわしく考察すればわかるように，国家とその死滅についてのマルクスとエンゲルスの見解は完全に一致していて，マルクスの前記の表現はまさにこの死滅しつつある国家制度をさしているのである。」[18]

前述のマルクスの引用から明らかな如く，レーニンは，マルクスが「死滅しつつある国家」すなわちプロレタリア独裁国家と区別して「共産主義社会の未来の国家的制度」を問題としていたことを理解しえずに，本質社会としての共産主義社会を，過渡期社会としてのプロレタリア独裁社会にスライドさせてしまっている。レーニンは，エンゲルスの理解を誤ったことからして，「無理やり」マルクスをも誤って理解せざるをえなくなってしまっている。

では，このレーニンの「誤解」が，彼の教育・文化論にいかなる問題を投げかけているのだろうか。

国家が，郵便，厚生等の共同利益にかかわる機能を果していることは確かであるが，レーニンは，それらを「階級抑圧機構」に還元して理解した。勿論，いかなるものについてもブルジョア国家においてはブルジョアジーを利する形においてのみ運営されることは確かである。しかし社会としての必須の機能を組織するという点では，レーニンの理解は不十分であるといえよう。

これ迄たびたび問題としてきた如く，レーニンの教育・文化論において，二つの方向性が交錯してきた。その一つは，普遍的な意味においての知的能力の形成であり，第二には，社会主義的文化創造，ひいては人間変革の問題である。この問題は後に整理して論じるが，ここでの問題としてあげるならば，以下の如き点を指摘しうるであろう。すなわち，あらゆる国家制度を階級抑圧の道具と把えることにより，「共産主義のもとでは，ある期間，ブルジョア的権利がのこっているばかりでなく，ブルジョアジーのいないブルジョア国家さえのこっていることになる。」[19]とレーニンはいってしまう。共同利害に関する諸制度もブルジョア的権利の枠内で理解されざるをえないのである。更にここから，教育・文化的変革がプロレタリア社会の土壌においてなしうるという視点が弱められ，強力なプロレタリア権力（孤立した）の下でのみの育成が，「ブルジョアジーのいないブルジョア国家」に対立してなされるという観点が前面化してくるのである。

だが，レーニンにあって，この路線は必ずしも一様ではなかった。革命的現実の展開の中で，その情勢の展開に従い，より現実的な方向が打ち出されてきたのである。しかしプロレット・クリト批判に見られる如く，革命後の基本的方向として，一つには過渡期社会における人間変革が，知的能力の形成に一面化され，後退さざるをえなかったとも考えられうるのである。

## 3. ブルジョア文化とプロレタリア文化

### a その理論と現実認識

レーニンはブルジョア教育・文化の自己内在的な論理をいかに理解していたのか。

実際の論文，著作として，極めて多様に，また現実的に展開されているレーニンの見解において，クルプスカヤがいうように「重要なことは，だれのために書かれ，だれに向って語られたかである。」[20] その「だれ」を見極めたところにレーニンの根底的な主張を見い出すことができるであろう。

レーニンは当面の，そして主要な「敵」に向って，彼が組織せんとしている労働者のために，常に問題を提起している。１８９５年に至るまでの時期，彼はその朋友ストルーヴェに向って，ロシアにおける資本主義の発展についての批判を試みた。それは急激なロシアの資本主義化（レーニンはこの時期においてロシアが既に資本主義に到達したものと考えていたと思われる）に対抗し，いかにそれを乗り越えた論理を構築するか，といった視点で書かれた。すなわち，新しい生産関係において「社会的諸階級の激烈な闘争以外に」[21]その現実の突破口はないのであり，徹底的に階級関係を暴露することを主張したのである。

また１９００年に至るまでの時期は，その主要な敵はナロードニキであった。彼らの革命観が資本主義を歪めた上で構築されていること，その改革を歪めていること。それに対するレーニンの批判は，絶対主義から資本主義への歴史の「客観的な」歩みを対置することであった。まさしく「絶対主義」に対し「資本主義」は「進歩」であったのである。

それ以後のレーニンは，主要な課題が「社会主義革命」を実現する党づくりであり，それに対する一切の諸党派は「敵」とみなされた。カデット，トルードヴィキ，ブンド，メンシェヴィキ。共産主義者が自然発生的に生み出されることはない，とするレーニンの論理は，同時にブルジョア文化の批判をも含んでいた。何故に独自の党を創らねばならないか？それはレーニンの党以外にブルジョア的影響を排除して，来るべき革命を社会主義革命として実現させることは出来ない，と考えたからである。すなわち，他の諸党派はブルジョア社会の自然発生性に依拠しているからと。

レーニンは，ブルジョア教育・文化の本質を，その「階級性」において把えていた。その教育・文化の内在する論理は，それ故に徹底的に支配階級の論理に貫かれている。だがレーニンはそれをそれとして問題とはしなかった。現実主義的な実践家としてのレーニンはもとより，「理論家」としてのレーニンもその「理論」を具体的な課題意識の下でのみ位置付けた。レーニンは決

してブルジョア民主主義を，またその教育・文化を「進歩」的なものと「反動」的なものとにふるい分けて理解してはいなかった。それは同じものが「だれに向って」「だれのために」を異とすることによって，異なった意味をもってくるにすぎない。客観的に所与のものとしてある「側面」ではないのである。

レーニンがブルジョア教育・文化を批判する時，その目は常にプロレタリア革命に向っていた。教育・文化をその「階級性」において明らかにしたレーニンにとって，問題はイデオロギーに集約される。「労働者大衆自身が彼らの運動の行程それ自体のあいだに独自のイデオロギーをつくりだすということが考えられない以上，問題はこうでしかありえない —— ブルジョア・イデオロギーか，それとも社会主義イデオロギーか，と。そこに中間のものはない。」[22] このレーニンの眼は革命ー権力の問題に焦点化されていた。権力を獲得するまでのレーニンの視点は，この意味において「一貫」したものであった。

ブルジョア文化についてこのような立場を示したレーニンは，教育に関しても基本的には同様であった。だが，より明確な形姿をもって具体的に展開される教育は，ロシアが急速に資本主義化しているなかで，なおかつ専制主義の防壁であり，レーニンは一方においてその身分制的教育への批判を，完成された西欧ブルジョア公教育との対比においてなし，他方，ブルジョア公教育のもつ本質的な階級性の暴露をなしていく。

レーニンの父が視学官として貴族の称号をえた，アレクサンドル二世治下の「大改革」の時代と異なり，１９世紀末以後の教育政策は，レーニンをして国民教育省を「国民愚昧化省」と皮肉らせた反啓蒙的なものであった。だが同時に急激な資本主義化への対応もなそうとしていた複雑なものでもあった。[23] こうした中でレーニンの教育論は文化論の系譜と同様の軌跡をたどっている。

１９００年に至る時期には，レーニンは明らかに教育に関しても，「ブルジョア的改革」を要求している。１８９５年の『社会民主党綱領草案と解説』は，その闘争の任務を「政治的自由」の獲得に集約し，種々のブルジョア民主主義的要求を掲げている。「政治的自由を獲得すること，すなわち，すべての市民が法律（憲法）に保障されて，直接に国民の統治に参加すること，すべての市民に，自由に集会をひらき，自分の問題を討議し，結社と出版物によって国政に影響をあたえる権利を保障することが，労働者のもっとも緊切な要求であり，労働者階級が国政に影響を与える点での第一の任務」[24]（傍線は引用者）とするレーニンの立場はヨーロッパの社会民主党と完全に一致したものであった。すなわち，そこにはロシアにおける資本主義の発展を促し，それによる労働者階級の発展を求めるという「正統的な」マルクス主義歴史観があった。綱領B(4)では，専制主義から資本主義への展開に対して次の如くその見解が示されている。

「ロシア社会民主労働党は，無制限の政府とその官吏との後見によって勤労者階級に恩恵をほどこそうとしたり，資本主義の発展を，したがってまた労働者階級の発展を阻止しようとするあらゆる志向にたいしてたたかうであろう。」[25]（傍線は引用者）

こうした一般的認識に立って，レーニンは専制教育の「身分制」を攻撃したのであるが，それ

は当時の戦略的位置から当然であった。それ故に，レーニンがブルジョア教育を，「進歩的」であると認識していたとはいえない。「身分制的学校を階級的学校でおきかえることは，ロシアの全般的，全面的ヨーロッパ化の過程のなかの一環にすぎないからである。」[26] という基本的把握からのみ両者を位置付けていたのであった。

１８９５～９６年の「綱領草案」，１９０３年の「党綱領」，１９１７年の「党綱領改訂資料」における教育条項を比較してみると，レーニンのブルジョア教育に対する見解が革命戦略の展開の中で明確に位置付いていることが理解されうる。

１８９５～９６年においては前述した通りであるが，「１９０３年」と「１９１７年」については次の点で，すなわち，　①民族教育，　②宗教教育においてその差異が明確である。民族教育に関しては，１９１３～１４年に集中的に論じた方向が１９１７年綱領に受け継がれている。すなわち，１９０３年綱領に対し，「強制的な公用語の廃止」という字句が加えられている。レーニンは，ブルジョアジーが母国語教育を認めると同時に公用語を強制していることを批判し，それが一つの民族の他の少数民族に対する特権を意味すると指摘している。」[27] 幾世紀もの間，大ロシア人の支配の下に置かれていた少数民族に対する方針は，目前のスケジュールに入ったプロレタリア革命にとってその成否をかけた問題の一つであった。レーニンは諸民族に共通の言語は強制されるのではなく自然に学びとられるであろうし，そうでなくてはならないと指摘しているが，この問題の公教育における位置を考えるならば，重要な提起であるといえる。

②に関しても，学校の単なる「非宗派性」から「学校の完全な非宗教性」への展開は，ブルジョア公教育とそれを乗り越えるものを区別するメルクマールである。資本制社会における階級支配と宗教との結び付きは，相互補完的な関係としてある。教会と学校の分離は近代公教育の原則の一つである。しかしそれは宗教と学校との分離ではなかった。何故なら，疎外の代替物としての宗教を排除することは，ブルジョア社会そのものの原理を崩壊させることを意味するからである。キリスト教世界，とりわけロシアにおける宗教問題は，革命性のメルクマールとして戦略的意味を付与されざるをえなかったのである。

革命後における，レーニンのブルジョア教育・文化の評価は，文化革命との関わりにおいてなされているが，それは革命の現実把握と革命のパースペクティブとの交錯の中で明らかにされねばならない。河合秀和氏はレーニンの理論を三つの段階に分け，その位置を把えている。すなわち，信念，理想，価値観などの「大理論」，状況分析としての「中理論」，そしてこの下に，認識を実践に媒介してゆく政策論，組織論があり，これを「小理論」としている。[28] 河合氏のこうした把握を踏まえつつ，これまでの検討から次の如く規定し直すことが出来よう。

① 社会主義社会への展望を含んだ「戦略」的次元

② 革命ソヴェト・ロシアの位置している革命現実，世界革命からの孤立，共産主義の後退的状況からする「戦術」的次元，または「大政策」的次元。これは革命の「持ちこたえ」としてのネップを軸とした基本的方針として表われる。

③ 個々の「政策」的次元。文化面でいうならば，学校建設，文盲撲滅運動，図書館事業の振

興等々。

そしてこうした三段階として理解した上で，この三者を貫通するものとして，特にレーニンが最大の留意を置いた「組織論」が位置付けられる。

以上の如く考察すれば，　①の戦略は，ロシアの現実から規定を受けつつ，一定程度目立したレーニンの社会主義論を内包したものであり，　②の戦術は，ロシアの現実をトータルに押え返したその全般的な方向，　③の政策は，ソヴェト・ロシア社会に生起する種々の実体関係＝階級関係の直接的反映，としてあることが理解できるのである。

b　ブルジョア文化の認識とプロレタリア文化の位置

レーニンにとって，ブルジョア文化の評価とプロレタリア文化創造の見解は，時期的にもまた内容的にも一様ではなかった。それ故に，レーニンの著述に立ち入る前に，「文化」の概念レベルをいかに理解するかを整理してみよう。

蔵原惟人氏は，「マルクス主義文化論」を展開するにあたって，「文化」を次の如く規定している。

「文化という言葉は，広い意味とせまい意味と二とおりにつかわれている……広い意味の文化とは，自然にたいして人間がつくりだすすべてのものを……せまい意味での文化は，このうち主として精神生活と社会生活の一部にかかわるもの……」[29]

いちおう氏の規定を踏まえつつ，特にレーニンの文化論を明らかにする上での視点から，レーニンの意識に即して具体的に「分類」すれば次の如きものとして理解できる。

① 物質的，あえて物的といえるような文化

② 仕事の手順，やり方といった習慣・文化

③ 純化されうる思想・イデオロギー

④ 「文化以前の」文化，読み書き，計算，

では，レーニンはこれらの「文化」をいかに位置付け，関連付けていたのか。まず新しい社会を創り出す上で，ブルジョア社会が残した文化がどう位置付くのか，についてレーニンは次の如く把えている。

「われわれは，共産主義を建設するにあたっては，資本主義によってつくりだされた材料をもととするよりほかには，またブルジョア的環境によってそだてられ，したがって不可避的にブルジョア心理に ―― 文化機構の一部としての人間材料を問題とするかぎり ―― 満たされた文化機構をもととするよりほかには，どうすることもできない。この点に共産主義社会を建設する上での困難があるのであるが，しかし他ならぬこの点にこそ共産主義社会の建設が可能であり，この建設に成功するという保障があるのである。」[30]

すなわち，封建社会からブルジョア社会への移行のように，旧体制の内部に新しいクサビを打ち込みつつ，それを拠点に変革をなしとげてゆくことが出来ない社会主義的変革は，ブルジョア文化をトータルなものとして受け継がねばならない。そしてそれは，新しい社会が「利用」すべ

きものとして受け継ぐことの出来るもの，すなわち，前の分類における ① そしてそれによって社会主義建設を困難にする，それ故に破壊せねばならないもの，すなわち，③。この二つを同時にブルジョア社会の遺産としてプロレタリア社会は受け継がねばならないのである。

そして，②に相当するようなものについては，レーニンは新しい社会基盤において柔軟に活用すべきと考えていた。その最も顕著な事例が生産性の向上についてであり，欧米に比べ極めて低い水準にあるロシアのそれを引き上げるためにブルジョア社会が生み出した諸方法の「科学的」なものを採り入れよ，とレーニンは主張している。

たとえば，資本主義社会において，最も「資本主義的」に発揮された「出来高払い賃金」と「テーラー・システム」を資本主義社会の最もすぐれた「成果」としてレーニンは位置づける。

「社会主義を実現することが可能であるかどうかは，われわれがソヴェト権力とソヴェト的管理組織とを，資本主義の最新の進歩と結びつけることに成功するかどうかによってこそ，できるであろう。」

こうした視点において，レーニンは「テーラー・システム」を次の如く評価する。

「この点での資本主義の最新の成果であるテーラー・システムは —— 資本主義の一切の進歩と同様に —— ブルジョア的搾取の洗練された残忍さと，一連のきわめて豊富な科学的成果とを —— すなわち，労働のさいの機械的動作の分析や，よけいな不器用な動作の除去や，もっとも正しい作業方法の考察や，もっともすぐれた記帳と統制の制度の採用，等々の点での科学的成果を， —— そのなかにかねそなえているのである。」(31)（傍線は引用者）

レーニンの頭にあったのは，確固とした，だが極めて非文化的なソヴェト権力，ソヴェト組織であった。そしてテーラー・システムのもつ「ブルジョア的搾取の洗練された残忍さ」は「確固たる」ソヴェト権力によって消滅させうるし，また一連のきわめて豊富な科学的成果は「非文化的」なソヴェト管理組織を活動的にし，文化的に高い水準へと導くことが出来るという確信であった。

最後に④の読み書き算。革命ロシアは「文化」の問題において，まずこの点から出発せねばならないというハンディ・キャップを負っていた。はたして「読み書き算」が「文化論」の中で，いかなる位置を占めうるのか。これはあたりまえに必須なことであり，その上で「文化」が問題とされるべきであった。しかし，まさに「ロシアの現実」がレーニンをして文化の問題をここから出発させねばならなかったのである。レーニン自身この読み書き算を文化そのものとして把えていたわけではない。(32) 現実が文化の問題をここまで「低めて」いたのであった。

さて，以上の如く「文化」についての「領域把握」をレーニンは四つの段階で理解していたといえるのであるが，その問題意識において，また「文化論争」において最も先鋭な形で提起されたのが，革命政策の中で③をいかに位置付けるか，という点であった。

革命初期において，「プロレタリアートの文化活動を広くおこし，『プロレタリア階級』文化の創造を目的として組織されたもの」(33)がプロレット・クリトであった。それは１９１７年－１９２０年の時期には「革命的労働者の全文化的活動を包括し，革命政府の特別の保護と援助を

えて発展し，最盛期には４０万人をこえる民衆をみずからの活動にひき入れた。」[34] ものであった。

ボグダーノフらいわゆる「プペリヨート派」の指導者を中心とするこのプロレットクリトは，文化戦線を「思想＝文化闘争」と把え，その課題を「『文化革命』，つまり『プロレタリア階級文化』の創造によって，民衆の意識と心理の変革，人間変革をおこなおう」[35] とするものであった。

レーニンはこのプロレット・クリトの方針を次の二点を軸として，１９２０年以降特に強く批判した。レーニンの「文化革命論」もこのプロレット・クリトの「文化革命論」との関連において位置付けられたといってよいだろう。

第一点は，プロレット・クリトが現段階での文化革命の任務を「プロレタリア文化の創造」としたこと。レーニンはこれをブルジョア文化を全否定したものとして受け取り，政治的・経済的闘争から切り離されたところで「新しい」文化の「創造」を考えているものと批判した。レーニンは第一回全露プロレット・クリト大会が民衆に管理を学ばせるという方向をとらなかったことを批判し，次の如き点を含んだ「決議草案」を突きつけた。

「４．マルクス主義は，ブルジョア時代のもっとも価値ある成果をけっして拒否しなかったどころではなく，二千年以上におよぶ人類の思想と文化の発展における価値あるものすべてを摂取し加工することによって，革命的プロレタリアートのイデオロギーとしての世界史的意義を獲得したのである。あらゆる搾取に反対するプロレタリアートの最後の闘争であるプロレタリアートの独裁の実際の経験にはげまされながら，この基礎のうえに，この同じ方向にむかってつづけられる将来の活動だけが，真のプロレタリア文化の発展とみとめられる。」[36]

レーニンにとっては，この時期の課題は「プロレタリア文化の創造」にあるのではなく，ブルジョア文化の「価値あるもの」を全大衆に受け継がせることにあったのである。

第二点は，その組織的位置付けであった。１９１８年８月２６日のプロレット・クリト全国組織ビューロー執行委員会拡大会議において，プロレット・クリトは形式的には，教育人民委員部プロレタリア文化課に所属しつつも，実質上は，「完全な自治を保障するものである」，という決議が採択されていた。そして内容的にも，プロレタリアートの文化的任務を「純粋に教育的課題」と「革命的創造の課題」とに区別し，前者を教育人民委員部が，後者をプロレット・クリトが行う，と把えていた。

副教育人民委員のポクロスキーは，レーニンの質問に対し，プロレット・クリトの位置を次の如く答えている。プロレット・クリトは「教育人民委員部の統制下で活動し，後者から補助金をあたえられる自治的な組織」[37] であると。そしてレーニンはこの「統制下」という言葉に「どうしてこれを実際的にやるか」という書き込みをし疑問を明らかにしている。そして更に１９２０年には，「自分たちの独特の文化を考えだし，自分たちの孤立した組織に閉じこもり，教育人民委員部とプロレット・クリトとの活動分野をはっきり区別するとか，あるいは，教育人民委員部の機構の内部でプロレット・クリトの『自治』を打ち立てようとするなど，あらゆる試みを，理

論的に誤った，実践的に有害なもの」[38]として，その組織方針を批判している。事実，プロレット・クリトは次の如き理由から「国家機関からの独立」を組織方針として提起した。すなわち，その方針は「現時点では権力はプロレタリアートと貧農に属している。各国家機関はそのあらゆる努力と希望にもかかわらず，仕事の中にプロレタリア的な世界観を完全に反映し，実現することができないでいる。まず，第一にそれらは大部分，ブルジョア・インテリゲンツィアを利用せざるをえない状態にあるが，彼らは程度の差こそあれ，ブルジョア的な気風を仕事にもちこんでいる……。」[39]という認識の下に，プロレット・クリト活動を，他の国家活動の上位に位置付けていたのであった。

レーニンはこの二点を軸として精力的にプロレット・クリト批判を推し進めると同時に，教育人民委員部の改組，予算編成等によって，その活動を制限していった。

このようにレーニンの「文化革命論」は，プロレット・クリト批判として典型化されるように，１９２０年を一つの境として「ブルジョア文化」の継承を前面化したものであった。

レーニンは，革命前において，ブルジョア民主主義（文化）を批判 ── 吸収 ── 批判という形で論じており，その全般的基調は，ブルジョア文化の反動性の暴露といえるものであった。しかし革命後は，１９２０年の『青年同盟の任務』を頂点とする両面の同時的推行の主張，晩年におけるブルジョア文化の肯定面の強調，とその方向を変えている。『青年同盟の任務』は，若き共産主義者たちに何よりも「学ぶこと」 ── 「共産主義を学ぶこと」を強調している。その内容は第一に，ブルジョアジーから受け継いだ「知識の総和」を身につけることであり，第二には，古い制度から受け継いだ古い遺産，すなわち古い習慣，古いならわし，大衆に徹底してしみ込んだ所有者的な習慣を克服すること，であった。

この時期は，晩年の危惧とは異なり，プロレタリア独裁の共産主義への早期移行がレーニンの頭の中で想定されており，そのために何が必要か，という形で文化の問題が論じられていた，といえよう。

第二の時期においては，この「同時性」が段階的に把えられている。[40]

「最初の五ケ年は，われわれの頭に，かなり不信と懐疑を詰め込んだ。たとえば，プロレタリア文化についてあまりに多くのことを，あまりに軽々しく弁じたてる人々にたいしては，われわれは心ならずも，不信と懐疑の念をいだきがちである。われわれにとっては，手はじめに，真のブルジョア文化で十分であろう。手はじめには，とりわけまぎれもない前ブルジョア型の文化，すなわち，官僚的，農奴的などの文化なしにやっていければ，まずまずであろう。」[41]

レーニンにとっては，事を急ぐことの危惧性を，とくに文化の領域で問題としなければならなかった。急ぐことによって取り残されるものが，孤立した革命ロシアの致命傷になるであろうと考えていた。

では，レーニンのなした二点のプロレット・クリト批判はいかに評価されるものなのか。第一点のブルジョア文化の評価および「プロレタリア文化創造論」に関してみれば，プロレット・クリトは確かに新しいプロレタリア文化の「創造」を基本としてその文化革命論を構築しており，

レーニンのように革命ロシアの文化水準の低さ，そしてその克服を第一義的に把えていなかった。プロレット・クリトの指導者プレトニョーフは１９２２年９月に『プラウダ』で「イデオロギー戦線で」という論文を発表したが，それはレーニンの激怒をかうものであった。彼は次の如く書いている。

「新しいプロレタリア的階級文化の創造は ―― プロレット・クリトの基本的な目的である。科学と芸術の領域におけるプロレタリアートのもろもろの創造力の発揮と集中が ―― その基本的な実践的任務である。……新しいプロレタリア的階級文化の創造は，文化普及主義的な任務ではない。」(42)

傍線はレーニンが書き込んだものであるが，そこからしてもレーニンがプロレット・クリトの如何なる主張を批判していたかが明らかである。プレトニョーフが「新しい階級文化の創造」と「文化普及」とを区別して，プロレット・クリトの任務を前者に重点化したのに対し，レーニンは全くその逆であり，同時に「新しい」プロレタリア文化の「創造」が空文句であると批判していた。

プロレット・クリトは，その組織論と関わっているが，この「新しい文化創造」を自らの任務とし，「文化普及」を「全住民大衆」を対象とした教育人民委員部の任務としていた。この上で，両者の力関係，ロシアの現実に対する政策的配慮は，レーニンおよび政府と異なった「民間団体」としてのプロレット・クリトにして，当然欠落せざるをえなかった。それ故，レーニンが直接的にコントロールしえないところから，その批判を，差異の過大視という形で先鋭化したともいえるであろう。事実プロレット・クリトの認識は１９２０年頃までのレーニンの主張と大差あるものではなかった。プロレット・クリト第一回全露代表者会議での一般方針に関する決議において，次の如く主張されている。

「(一)その課題達成のためにプロレタリアートは先行する文化の全成果を会得し，そこから全人類的なものだという刻印をおびているものをすべて摂取しなければならない。 (二)プロレタリアートは摂取したすべてのものを批判的にうけとめ，自己の階級意識の炉の中でつくり直さねばならない。 (三)プロレタリア文化は，プロレタリアートが新しい知識で武装し，新しい芸術を媒介としてみずからの感情を組織し，その生活態度を新しい精神，真にプロレタリア的な，集団主義的精神に変革しうるよう，革命的社会主義の性格をおびなければならない……。」(43)

(一)においては，レーニンが主張するのと同様に，先行文化の摂取を掲げ，(二)では，その批判的摂取および改造を，そして(三)では社会主義的精神，モラルの確立を主張している。

レーニンがプロレット・クリトを批判する背景には，その具体的な活動方針と共に，プロレット・クリトがボグダーノフらの「マッハ主義者」によって指導されている，という哲学戦線上の問題があった。そして一時は独自に４０万人以上の民衆を組織するという状況からして，その路線の影響力への危惧も当然あったと考えられる。

だがなによりも，プロレット・クリトが前に整理した「戦略」的次元で文化論を構想していたのに対し，レーニンは「戦術」的次元で把え返し，更にはより具体的な「政策」の段階で，そし

て組織を媒介として考えていたことの差異が主要なものであった。１９２０年を境としてレーニンの文化革命論が「ブルジョア文化」の吸収に集約され，プロレット・クリト批判が勢いを増していった根底には，レーニンの立てた戦術的諸課題，「労農同盟」の強化，「党および政府組織の改革」が緊急性を増大させていたこと，それとの結びつきにおいて人民の「知的水準」の向上を文化革命の柱としたこと，があったといえる。

レーニンの「文化」把握は，「読み書き算」，「衛生管理」といった，いわば文化の前提となるべき「文化以前の文化」へと集約されていった。それに対しプロレット・クリトは「文化」をまさに「文化」として把握し，その上で「文化革命論」を構築していた。この位相の差異を無視して自らの領域に移し入れたところにレーニンの問題があるといえる。だがそれも，視点を変れば，すなわち，その時点で「だれに対し，だれのために」何を言うべきかといった時に，「政策者」レーニンの正当化される根拠があるともいえよう。だがそれによってレーニンが段階的に把えたところの次の段階の問題，すなわちプロレット・クリトが正しく提起した「プロレタリア文化の確立」そのものが相対的に視野から遠のいたことは大きな損失であったといわねばならない。このようにレーニンのプロレット・クリト批判は極めて一面的なものを含んでおり，とりわけ社会主義革命を文化的に保障してゆく上で，大きな問題を残さざるをえなかったといえる。

## 4. レーニン教育・文化論の問題と課題

レーニンのブルジョア文化に対する評価については，次の三つの見解に整理されるであろう。①A・ルフェーブル，蔵原惟人氏らにみられる，レーニンの立場を絶対的なものとするもの，②和田春樹，和田あき子氏らによる，レーニンの人間変革論の弱さを主張するもの，　③菊地昌典氏らの，プロレタリア文化放棄論。

ルフェーブルは「文化問題でレーニンがとった立場は，中央主義とか，左右の偏向のあいだの中間の道であると規定されないのであって，かれの立場は党の立場であると規定される」(44)とし，文化の党派性がレーニンの基本的立場であると述べている。彼がここでいう「党派性」は，党の指導性を認めること，「党とともに」進むことであり，プロレット・クリトの組織問題でレーニンの示した立場を踏まえたものといえる。

またルフェーブルは，レーニンが官僚主義と闘ったことを指して次の如くレーニンの思想を把えている。「プロレタリアや党員をふくめて人間は，世界を変革させるために自分自身を変革しなければならないし，また自分自身を変革するためには，世界を変革しなければならない。道義的，思想的変革は，かれにとっては実践的，社会的変革の本質的な側面であった。このように新しい世界，新しい人間，新しい意識が，かれにあっては，社会主義と規定されたのである。」(45)レーニンにあって，こうした視点があったことは確かであるが，それが普遍的に貫徹されていると見るのは，レーニン自身の現実的課題設定から十分とはいえない。

蔵原氏は１９４７年に『文化革命』を著わし，文化革命を「文化の量的な変革」と「文化の質

的な変革」の二つの側面から把え，レーニンがいかにロシアの現実をふまえて過渡期の文化の問題を提起したかを強調している。氏は「レーニンはただにプロレタリア文化が革命的実践のうちにのみ生まれることを主張したばかりでなく，彼にあってはプロレタリア文化についての問題提起そのものが実践的であった。」(46)ことにレーニンの正しさを求め，レーニンがブルジョア文化を摂取せよ，としたことを現実的に絶対化して理解している。レーニンが晩年に「ブルジョア文化の摂取」に一面的に傾斜していった点について，しかし氏は明らかに誤った解釈をなしている。氏はレーニンの『量は少なくとも質のよいものを』の冒頭部分を次の如く訳し，その解説をなしている。

「レーニンは革命直後のソヴェト同盟で『我々は初めのうちは真実のブルジョア文化で十分である。我々は初めのうちは，ブルジョア前期型の文化 ―― すなわち官僚文化あるいは農奴制文化等々の八重咲きなしに済ませれば十分である』といったが，ここで『真のブルジョア文化』といわれているのは主として古典的時代のブルジョアジーとその伝統の上にたつ健全なブルジョア文化のことであって，けっして末期的な頽廃文化をさしているのではない。」(47)（強調は引用者）

また１９６６年の『マルクス・レーニン主義の文化論』においては，その訳こそ大月版『レーニン全集』によっているが，それに対する見解は前書と全く同様である。(48)

このレーニンの引用は氏が幾つもの著書で，何回もなしていることからしても，氏の「レーニン文化論」の中心点であるといえる。

しかしながら氏は，重大な読み違いをしている。レーニンが言ったのは「前ブルジョア型」，すなわちブルジョア社会以前の官僚的，農奴的文化を乗り越えることであった。氏はこの「前ブルジョア型」を「ブルジョア前期型」と訳し違えることにより，レーニンがブルジョア文化を，その「前期」のものと「後期」のものとに区別し，前者の摂取を主張したとするのであるが，レーニンが述べた問題意識はそんなところにあるのではなく，あくまでも「前ブルジョア的」な，すなわち，封建的，専制的な文化に対してのブルジョア文化の「肯定」であった。(49) レーニンが強調したのは，蔵原氏とは逆に，ありのままのブルジョア文化そのものであったのであり，レーニンの主張において，それはブルジョア文化以前の文化の否定ではあれ，一面的な強調であったのである。

氏は正しくも「文化革命」の課題を「人間の社会主義的変革」としつつも，レーニンを絶対視することによって，レーニンを「拡大解釈」してしまっているのである。同時に氏は，レーニンの「文化革命論」が段階的であるといっても，レーニンそのものの変化を平板化し，１９２０年当時のレーニンの主張を１９２３年当時に移入してみる，という誤謬に陥ち入っている。(50)

第二の評価。和田春樹氏は，レーニンのブルジョア文化に対する見解を次のように把えている。

「レーニンはネップの条件の中で農民を中心とする民衆の文化的向上，彼らの間へのブルジョア文化の成果の普及を第一の任務としていた。レーニンのこの考えを特徴づけているのは，段階論的発想であり，彼においては思想教育による人間変革という考え方がほとんどみあたらないといえよう。(51)

これまでの行論において明らかなように，氏の見解は，レーニンの展開が１９２０年以後，ネップ下での労農同盟の強化を農民の文化的向上＝ブルジョア文化の普及として追求し，人間変革的要素が遠のいた，とする点で同意しうるものである。こうした見解をより詳細に論じたのが和田あき子氏である。氏はレーニンの見解を段階的に検討している。まず，１９１９年当時において，レーニンは「民衆の変革の内容の比重を文化的能力の変革という点において考えて」おり，その内容はなによりも，「労農大衆の『文化水準』＝管理能力を向上させ彼らと旧官僚および急進的プロレタリア層との間の文化的格差をなくすこと」に重点があったと把えている。(52)

そして１９２０年に至って，「レーニンが民衆の変革の問題を，管理の能力，労働の能力の向上，および労働態度，生活意識の変革という二つの契機からとらえていたのは鋭い問題提起」であった，と評価し「共産主義への早期移行が想定されていた時期は，レーニンの人間変革論がもっとも全体的に展開された時期でもあった」と位置付けている。(53)

しかし，こうした「鋭い問題提起」も「共産主義への早期移行」の困難性が明確になるに従い，視点が変容してくる。１９２１年１０月には「明らかに，一定の文化水準の達成ということがすべての前提におかれており，このことは，従来結合されてきた文化的能力の向上と，古い習慣や思想の克服という民衆の変革の二つの内容，二つの契機が一方が他方の前提として段階的に構成されるにいたったことを意味しており，レーニンの課題意識が大きな変化をみせたことを物語っている」と評価している。(54)

そして結論的に「字が書ける，書物を読む，衛生的にする，能率的に仕事をする，などといった現象を，プロレット・クリトに対抗するあまりに『ブルジョア文化』だとしたことは，たとえこれらが歴史上は先進国の資本主義によって押し進められたものにせよ，問題をはらんでおり，とくにこのことは，ブルジョア思想との徹底したたたかいという課題を弱める結果をまねきかねないもの(55)であり，「革命前には，あれほどはげしく資本主義文化の暴力，蛮行をあばいていたレーニンが，革命後にはブルジョア文化の肯定面のみを見，さらにまた『労働者階級は，自分の力だけでは，組合主義的意識……しかつくりあげえない』として民衆の意識，思想変革へのたえまない働きかけを強調してきたレーニンが，民衆の自己変革の課題をもっぱら『文化的変革』＝『能力』の変革とし，思想教育の課題を同時的に追求すべきものとして強調しなかったのは，明らかに晩年のレーニンの思想的後退であった。(56)としている。

氏のレーニン「文化革命論」評価は，レーニン自身の思想展開を詳細に踏まえており，極めて妥当なものと考えられるが，だが問題となるのは，レーニンの現実への対処の軸を十分に評価し切っていない点と，その全展開がレーニンにとっては組織論に媒介されていたことに対しての視座が脆弱なことであり，「後進国革命」においてのと，「先進国革命」においての「文化革命」の位相が明確にされえていないことである。

最後に第三の見解。それは１９６６年当時の菊地昌典氏のものであるが，この時期の氏の主張は，中国における「文化大革命」の頂点を背景とし，またそれから強烈な影響を受けたものであるところから限定的な意味をもっているともいえる。

氏は「人間変革の理論と実験 ―― 中ソ文化革命の比較考察」という論文において，次の如く主張している。

まず第一に，レーニンの「文化革命論」の軸が「ブルジョア文化を尊重する精神」によって貫徹されている，と把え，それが晩年（１９２１～２３年）において「帝政ロシアのうんだ真のブルジョア文化」で十分であるという主張として全面的に展開されたことにより，ソ連における「プロレタリア独裁下でのプロレタリア文化の創造と，文化革命 はなかば否定された，[57] とする。

そして第二には，ここに氏の当時の視点の特徴が著しくみられるのであるが，ソ連において「革命初期にたかくかかげられた没我的，献身的な共産主義的人間像は世界革命という『幻想』の崩壊と，一国社会主義論の成立，そのナショナル・インタレストのあくなき追求の中に消滅してしまい，ソ連社会の近代化の進行とともに，円満な人格をもつ教養ある人間，個人の幸福と社会の幸福をあわせもとめる人間像が誕生し，定着することになった」[58] と結論づける。

氏の視点は，現代のソヴェト社会を急激な勢いで展開されていた中国の文化革命の問題状況から把え返すところにあり，そのソヴェト社会の否んだ現実をレーニンにまで逆のぼって追求したことに特徴をもっている。そして中国自身が自己の路線とスターリニズムとの違いに気付き，その否定へと進むべきであると，近年指摘している。中国の文化革命に関して，ここで論ずる紙数はないが，レーニンとスターリンの路線上の対決点，またスターリニズムと毛沢東主義との継承関係を原則的に踏まえた立論は求められてしかるべきであろう。

以上の如く諸氏の見解を検討し，レーニンのブルジョア教育・文化観を概括した上で，ブルジョア教育・文化をいかなる方向性において把え返すかが問題である。

レーニンがすぐれて提起した，先行する，そしてより進んだブルジョア文化の新しいプロレタリア文化に対する関係は，レーニン死後半世紀を越えた，また「先進資本主義国」である現在の我が国においても基本的にあてはまる。ただ階級状況の流動化・プロレタリア文化の「相対的自立性」の確立，教育の一層の「開放性」等々は，この関係を露呈することを困難としていることも確かである。だがそれだけにかえって，物質的にも，意識的にも不断に再生産されている，プロレタリアートの自然発生性への依拠に対する闘争の意味は重要性を増している。

この自然発生性依拠に対する闘い，ブルジョア文化の批判・克服は次の如き方向の下で位置付けられるべきといえる。

第一。レーニンの提起した如く，自然発生性へのアンチ・テーゼは，プロレタリアートの強固な，意識的な組織化である。強固な組織的・制度的枠組みをもっているブルジョア国家にあって「拡散的」にそれに「自立した」組織・制度を構想することは改良主義的な夢想に等しい。ただブルジョア社会のもっている論理を転倒させた論理を内在化せしめる組織化のみが唯一必須にして，可能な方途であり，この点に関してのレーニンの「現実的」「実践的」正当性を継承すべきといえる。

第二。第一が極めて革命運動そのものの方向性の下で構築されるのに対し，ブルジョア教育・

文化に対する徹底した批判闘争はより広い領域において必要であり，可能である。これも同様に，ブルジョア教育・文化の論理を転倒させた次元においてなされるべきものであり，「批判」そのものがその「批判対象」と同次元で衝突すると同時に，異次元へと突き進むものでなければならない。とりわけ教育が公教育として強固な国家原理の下に包摂されているところにあって，異なった論理の教育制度体系を「運動そのもの」として「要求」すること自体，改良主義的枠内に留められねばならない。それ故にこの「批判運動」が教育闘争においてもつ意義は重要であるといえよう。

レーニンが正しく実践的に展開したのは，この第一，第二，であり，更にその両者の有機的結合であったといえる。

だがしかし，レーニンと異なった様相・現実に位置する者にとって，過渡期社会における「文化革命」「教育改革」のパースペクティブを明確にすることは実践的にも重要であり，それは「レーニンの限界」を乗り越えてなされねばならないであろう。

## 5. 過渡期社会の教育・文化

### a ロシアの現実と過渡期社会の原理

二月革命以後，「二重権力」状況下においてレーニンは，この状況がプロレタリアートにとっていかに反動的なものであるかを，そしてその打破のためにプロレタリア革命がいかに必要であるかを，プロレタリアートの権力奪取が何を変革し，何をもたらすかを表わすことによって提起した。それが『党綱領改訂資料』であり，『国家と革命』であった。

そこにおいてレーニンは，マルクス・エンゲルスの国家論を把え返し，当時の情況に即して強調点を位置付け直した「原理的」な展開をなしている。マルクスが『フランスの内乱』で示したパリ・コンミューンの教訓をレーニンも受け継ぎ，『ゴータ綱領批判』で示した「プログラム」をロシア革命の中で提起しなおしたのである。

『国家と革命』においてレーニンは，過渡期社会における教育・文化を次の如く位置付けている。

「記帳と統制 ── これが，共産主義社会の第一段階を『調整』するために，これをただしく機能させるために必要とされる主要なものである。」(59)

社会発展を「原理化」したプロセスとして把えた場合に，共産主義社会を準備するに必要なものとしては，この「記帳と統制」が主要なものである。レーニンは勿論，ア・プリオリにこう提起している訳ではない。権力奪取後の社会発展を，①「資本主義から共産主義への移行」期，②「共産主義社会の第一段階」，③「共産主義の高度の段階」，として把え，それを貫徹してゆくものとして，民主主義 ── 階級支配 ── 国家の「死滅」（この概念についてのレーニンの混乱は，前に検討したが）平等 ── 権利の止揚，そして人民の「記帳と統制」の習得，を位置付けているのであり，ブルジョア社会における教育・文化のイデオロギー性が，①の段階で転倒し，

プロレタリアートのイデオロギー性は，「多数者が少数者を抑圧する」が故に普遍的論理を内在しており，②—③の段階へと進むにつれて，そのイデオロギー性そのものすらが「死滅」してゆく,とし最後に残るものが「記帳と統制」機能である，としているのである。

これは，マルクスが『フランスの内乱』においてテーゼ化した「コンミューン型国家の原則」「労働証書による賃金」，「常備軍・政治的警察の廃止と人民の武装」「公務員に対する人民のリコール権」等々，を踏まえた「原理的」な「論理」であった。

レーニンが『国家と革命』で述べた内容はたんに「原理的」というのみではなく，あらゆる意味で，プロレタリア人民を信頼したものであった。教育・文化に関しても例外ではない。だが，権力奪取後，すぐさまその「幻想性」に突き当らざるをえなかった。旧専門家を援用することにより，コンミューン国家の経済原則は崩され，外国からの干渉は，より強固な秩序をもった「常備軍」を必要とし，国家機関を運営するためには旧政府の官僚に依存せねばならなかった。革命ロシアをとりまく現実は，「プロレタリア政権」に「時間的余裕」を与えてはくれなかったのである。

レーニンが主張するように，過渡期社会，プロレタリア独裁社会は，あくまでも共産主義社会を準備することにおいて，その「過渡期」性の意義がある。まさに「記帳と統制」に示される如く，人民の社会運営能力と共産主義的習慣・モラルの形成こそが，この過渡期において「形成」されねばならないものであった。これなくしてはそれが準備した共産主義社会も変質せざるをえないこともレーニンの主張から当然出てくるものであった。

レーニンのとった「後退的」措置は，当時のロシアが置かれていた状況から，現実的なものとして認められねばならないであろう。だが「共産主義」が遠のくにつれて，同時的に追求されるべきそれへの準備が段階的になり，過渡期社会の論理が弱められていったことに，レーニンの，その後のソヴェト社会の変質に対する責任があるといえるのである。レーニンはその強調のアクセントを，一方によって他方を消滅させるほどに変化させてはいるが，その時々の限定性を放棄することはなかった。だがその「後継者達」がこの「限定性」を「普遍化」したところに現代の悲劇があるのであり，その生存中最高指導者であったレーニンにその責任の一端を求めることもやむをえないといえる。

これ迄，包括的に「教育 —— 文化」を見てきたが，文化一般がより多様な社会的要素に直接的関係をもっているのに対し，教育，とりわけ国民教育は次代の共産主義の担い手を育成する，という点でニュアンスの差異を有せざるをえない。事実，１９１８年の「単一労働学校令」「単一労働学校の原則」で示された過渡期教育の根本が，当時の状況，とくに物質的な情況から，大きく現実的に修正されざるをえなかったとしても，レーニンの意を介したクループスカヤらによって作成された「グース・プログラム」やレーニンのポリテフニズムの方針においては，明らかにこの共産主義への準備が原則として確立されているのを見てとることができる。

ここからして，レーニンの「文化革命論」を広い意味での「文化一般」と，狭い意味での「教育」，とくに児童 —— 生徒の教育とを区別して再検討する必要が生じてくる。そしてこの両者

を統一的に把握したところにレーニンの位置が定まるといえよう。和田あき子氏のレーニン文化論把握も，こと教育に関する具体的な検討を欠いているが故に，その「一面性」を免れえないといえる。

レーニンがより直接的に展開したのは「文化一般」，それ故に全般的方針，であり，教育の具体的内容は，様々な媒体を通じてインパクトを与えつつも，クループスカヤ，ルナチャルスキーらに委ねられていた。それ故にレーニンの「文化革命論」として前者が前面に押し出されることはさけられないとしても，後者がクループスカヤという強力な媒体によってレーニンの意を十分に反映していたと見てとることが出来る。

「文化一般」が流動的なものであり，それ故に様々なイデオロギーの影響を受け，組織的に方針化し難いのに対し，教育はより固定的な枠をもっている。この両者の差異が，その内容において，前者の強力な規制，後者のプロレタリア的人間の主体形成という形で，レーニンによって打ち出されたと十分に考えられるのである。

b. 先進国革命における過渡期と教育・文化革命

レーニンの志向した教育・文化変革のモメントは，ロシアにおける過渡期社会が絶対主義から社会主義への飛躍を生み出さねばならないという現実と不可分に結合されたものであり，レーニン自身そうであったように，その現実からする限定性ゆえに過渡期社会の本質的論理が埋没しがちであった。しかしながら，なおそこにおいてレーニンの論展開から過渡期社会における教育・文化変革の本質的モメントを見い出すことも可能であった。そのモメントを，ロシア的特質を除去した先進国革命の場で考察するならば，いかなる方向性の下で把えられるのか。

レーニンは，先行する文化が後続する文化を決定的に規定することを自然発生性への拝跪を批判するなかで強調している。とりわけ絶対主義社会から資本主義社会への移行と異なり，資本主義社会から社会主義社会への移行は，前者が生産様式の変革が先行し，その総括として政治革命（ブルジョア革命）をもっているのに対し，後者は政治革命（プロレタリア革命）が先行し，その権力下において意識的に生産様式の変革がなされることからいいうるのであった。すなわち基本的に下部構造が上部構造を規定するが故に，その時代の文化はその時代の生産様式の枠組で構築されている。ブルジョア社会にあって，たとえプロレタリア文化が部分的にであれ存在しうるとしても，文化そのものが社会的諸関係，生活様式を総括するものである以上，きわめて限定的な意味，相対的な意味でのそれでしかなく，ブルジョア文化が圧倒的であることは間違いない。

レーニンが１９２２年に第１１回党大会において述べているように，[60] 権力奪取後においても，「被抑圧階級」が「抑圧階級」よりも文化的な場合，その「抑圧」関係は逆転する，ということはいかなる場合においても妥当であろう。ブルジョア社会からプロレタリア社会への移行を考える場合にあっても，基本的に同様である。ただロシアにおいては，ブルジョア文化が構築してきた幾世代もの時間をブランクにしており，それ故に一方にそのブランクを埋めつつ，プロレタリ

ア文化をその過程で構築せねばならないという二重性を受けていたのである。

こうしたロシアとは異なった，それ故に本質的に規定しうる基盤にあっては，プロレット・クリトの主張が極めて重要な意義を有していることは，これまでの行論からも理解されうるであろう。すなわち，文化はそれ自体社会から自立して把えられるものではなく，その社会の生産様式，労働過程の中でのみ位置付くものである。そうである以上，ブルジョア社会によって創り出された高い技術水準を異なった生産様式，労働過程に「適応」させることが必要であり，それを媒介してゆく「思想」が要請されねばならない。それは生産に対する論理であり，人間関係，社会的モラル，精神構造そのものであり，ひいては人間の変革である。

このことはブルジョア文化の１８０度の裏返しではない。ブルジョア文化は決してそれほど単純なものでもないし，「統一的」なものでもありえない。これはレーニンが正しくも提起している如く，ブルジョア文化をその「階級性」において集約し，その論理的転倒をなした上で，拡散するところに位置付くものである。

こうした方向性の中で近代公教育変革はいかなる視座において把え返されねばならないのか。現代資本主義社会が国独資としての，また福祉国家としての構造を顕著にしつつあることは，公教育がレーニンの時代とは異なった様相を呈していることを意味する。それはプロレタッアートの「改良」的要求を体制化しつつ自らを強化するという装置を内在化し，外的・形態的には新しい「共同利益」を追求する社会への「変化」を意味するかの如くである。だが，そこにおける近代公教育の基本的原則は依然として保持されるし，それだけに近代公教育の本質的な否定状況は拡大されていく。

ブルジョア公教育としての近代公教育は，その目的機能を第一義的に経済的基盤から生み出している。ブルジョアジーは「学校を人間の人格を育成する道具とならせるために配慮したためしは，ただの一度もない。」　というレーニンの指摘は本質的に正しい。すなわち，ここでレーニンの言う「人間の人格」とは，あれやこれやの「人格」ではなく，人間の人間としての人格である。近代公教育が人間を人間として，すなわち物象化された人間としてではなく，育成することは，本源的に自己矛盾せざるをえない。なぜなら近代ブルジョア社会そのものが，この物象化の上に成り立っているからである。

ここからして過渡期社会（この物象化を除去しうる第一の前提が作り出された）においての教育は，近代公教育が本質的に疎外してきた人間存在を恢復することを志向せねばならない。すなわち，人間関係の本質的な変革こそ，この過渡期における教育が追求せねばならないのである。

レーニンは，この点について具体的，明確な主張をなしていない。それは次の如きレーニンの位置していた現実から説明されえよう。すなわち，ロシアにおけるツァー政府は，それ自体，絶対主義的なものであったこと。そしてこの絶対主義から資本主義への過渡にあったこと，しかも急速な。このことは社会発展そのものが教育の資本主義的改革を要請していたのに対して，政策としての教育が決定的に立ち遅れざるをえなかったことを意味している。新興ブルジョアジーはその経済的要求を教育に反映させんとしていたにもかかわらず，政策側は教育の「経済的目的」

に対しての意識が脆弱であった。レーニンはブルジョアジーの「要求」の限界を指摘しはしたが，そのブルジョア教育が完成された状況に立って，具体的・現実的に主張する必要はなかったといえるのである。

近代公教育の人間関係の本質的変革は，より直接的な形としてその実体関係の変革に向わねばならない。すなわち，教授 ── 学習過程を構成する実体，教師 ── 子どもの関係の変革へと向わねばならない。マルクスが生産的労働（Produktive Arbeit）を教育（Unterricht）と体育（Gymnastik）とに結合することが全面的に発達した人間（vollseitig entwickeIter Menschen）を生み出すための唯一の方法，とした意味も教師 ── 子どもの関係を外延化する方向，すなわち，教育そのものが本質的に持つべき機能を「生産的労働」に求め，教師 ── 子どもの関係をその中に還流させる方向に教育の変革を求めたことにあるといえるのである。(62)

この意味からして，知育を軸とした「教育専業機関」としての近代以降の学校および学校形態の教育の変革は，一方における思想の変革としての文化革命と共に，先進国革命の主要な課題として検討されねばならないといえよう。

註

(1) レーニン「教育省の政策の問題について」『レーニン全集』第７巻，大月書店（以下全集と略）
(2) 全集２４巻２１頁
(3) 全集３５巻２８１頁
(4) 全集５巻３９４頁～３９５頁
(5) 全集５巻４０２頁
(6) Ｈ．ルフェーブル，大崎平八郎訳『レーニン』３３０頁ミネルヴァ書房　１９６３
(7) 全集５巻３９５頁
(8) 全集５巻４０４頁
(9) 全集５巻４０６頁
(10) 全集５巻４０７頁
(11) 全集５巻４０８頁
(12) 全集５巻４０９頁
(13) 全集５巻４０７頁
(14) 全集２５巻４２６頁
(15) 全集２５巻４２８頁
(16) 全集２５巻４１８頁

(17) K．マルクス．『ゴータ綱領批判』国民文庫版５６頁

(18) 全集２５巻４９４－４９５頁

(19) 全集２５巻５０９頁

(20) クループスカヤ，加藤久一郎訳
『続・レーニンの思い出』１１４頁青木文庫

(21) 全集１巻４１８頁

(22) 全集５巻４０６頁

(23) 「政府の反動的教育政策は，２０世紀初めの国民教育の発展を著しく遅らせた。国内では工業と運輸が発達し，教師や他の高級専門家ばかりでなく，熟練工や単に読み書きのできる労働者さえ，ひどく不足していたので，政府の反動政策は，国内の強い要求にまったく適しなかった。事態に影響され，また世論に押されて，反動派の策動にもかかわらず，２０世紀初めには学校と学生・生徒の数がふえている」（ソ連科学アカデミー編，『ロシア近代文化史』２０５頁ミネルヴァ書房１９７２）

(24) 全集２巻１００頁

(25) 全集２巻７８頁～７９頁

(26) 全集２巻４６３頁

(27) 全集２０巻６３頁

(28) 河合秀和『レーニン』７頁，中央公論社，１９７１

(29) 蔵原惟人『マルクス・レーニン主義の文化論』１０頁，新日本出版，１９６６

(30) 全集２８巻４１６頁

(31) 全集２７巻２６１頁

(32) レーニンは「自分自身の読み書き能力 ── 文化性とは言わないで，読み書き能力と言おう ── 」と述べている。（全集３３巻４８３頁）

(33) 和田あき子「ロシア革命における人間変革の思想」江口朴郎編『ロシア革命の研究』７９０～７９１頁，中央公論社，１９６８

(34) 和田あき子，前掲書，７９１頁

(35) 和田あき子，前掲者，７９１頁

(36) 全集３１巻，３１５～３１６頁

(37) 蔵原惟人，高橋勝元，編訳『レーニン，文化・文学・芸術論』下，７１１頁，大月書店

(38) 全集３１巻３１６頁

(39) 和田あき子，前掲書，７９８頁

(40) 蔵原惟人氏も和田あき子氏，和田春樹氏，菊地昌典氏もレーニンの「文化革命論」が段階論的なものであると理解している。しかし各氏によって，それをいかに評価するかが一様ではない。

(41) 全集３３巻５０８頁

(42) 全集３５巻６１２頁

(43) 和田あき子, 前掲書, ７９６～７９７頁

(44) Ｈ．ルフェーブル, 前掲書, ４４５頁

(45) Ｈ．ルフェーブル, 前掲書１４１～１４２頁

(46) 蔵原惟人『文化革命』６０頁, 岩波書店, １９４７

(47) 蔵原惟人, 前掲書, １６７頁

(48) 蔵原惟人『マルクス・レーニン主義の文化論』９３～９４頁, 新日本出版社　１９６６

(49) レーニンは≪doburzhuaznyi poriadok≫といっており, ≪do≫の用語法は接頭辞として「～以前」の意しかない。例えば≪dovoennyi≫は「戦前」であって, 「戦争前期」ではない。

(V.I.Lenin. " socnneniia " TOM 33.str. 445 izdanie chetvertoe, gosudarstvennoe izdatel'stvo politicheskoi literatury 1951 )

(50) 蔵原惟人『文化革命』１６７～１６８頁

(51) 和田春樹「ソヴェト文化論ノート」
岩間徹編『ロシアの文化』１４８頁, 河出書房新社　１９６５

(52) 和田あき子, 前掲書, ８０５頁

(53) 和田あき子, 前掲書, ８０６～８０８頁

(54) 和田あき子, 前掲書, ８１０頁

(55) 和田あき子, 前掲書, ８１２頁

(56) 和田あき子, 前掲書, ８１３～８１４頁

(57) 菊地昌典　「人間変革の理論と実験 ― 中ソ文化革命の化較考察」『潮』１９６６年１２月号, ６０頁

(58) 菊地昌典, 前掲誌, ８７頁

(59) 全集, ２５巻, ５１１頁

(60) 全集, ３３巻, ２９３～２９４頁

(61) 全集, ２８巻, ４４０頁

(62) K.Marx "Das Kapital" B.Kapital Maschinerie und groβe Industrie (Abschnitt Die Produktion des relativen Mehrwerts) Marx - Engels Werke 23.pp. 506-508